九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

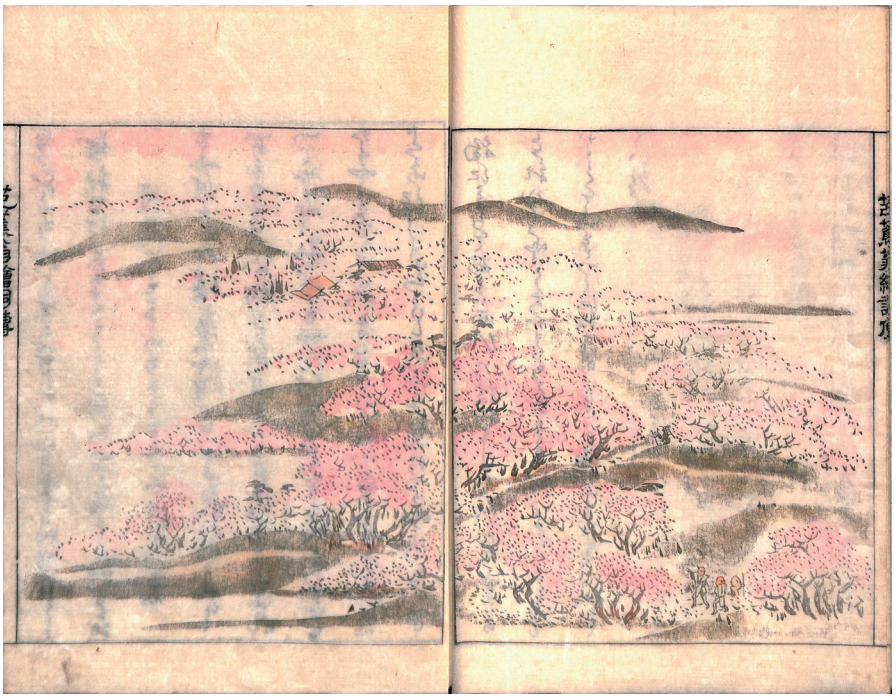
芭蕉翁絵詞伝

村上, 義明
九州大学大学院 : 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/1811264

出版情報：文獻探究. 54, pp.1-, 2016-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

『芭蕉翁絵詞伝』（九州大学附属図書館　雅俗文庫蔵）



（一）吉野山の図

（二）義仲寺の図

解説

村上義明

今回掲載する資料は、文人僧蝶夢（一七三二―一七九五、六十四歳）が安永末頃から発案し、狩野正栄が絵を描き、寛政四年（一七九二）に成立せしめた巻子本三巻の写本を、大本三巻三冊に仕立て、吉田偃武が挿絵を縮写した『芭蕉翁絵詞伝』で、これは芭蕉の生涯が旅の連続であったとする観念を後世に伝えた。本書は、昨年五月、九州大学附属中央図書館にて開催された貴重文物展示の図録『雅俗繚乱―中野三敏江戸学コレクションの世界―』において一部紹介した。

著者蝶夢にかんする詳細な研究に、佐賀大学名誉教授の田中道雄先生の『蝶夢全集』がある。ここに本書を底本にした翻刻・解題が備わる。解題中に「中野三敏蔵」とあるが、今は「雅俗文庫」にある。『芭蕉翁絵詞伝』について田中先生は、

当書は、晩年の蝶夢が、芭蕉百回忌に向けて精魂を傾けた、畢生の大作、大振りの絵入り本である。伊賀などで収集した芭蕉所伝など取り込むが、新事実には乏しい。しかし、芭蕉を蕉風俳諧の祖と見る立場からその生涯を全円的に叙述し、鑑賞に値する最初の本格的芭蕉伝として仕立てた、その意義は大きい。

と記されている。

『芭蕉翁絵詞伝』は寛政五年に刊行されたのち、近代に至っても度々刷られた。後刷り本である雅俗文庫本の最大の特徴は、諸本には見られない手彩色が施されている点で、田中先生の言を借りれば「特別誂えの珍本」である。挿絵は全部で三十三葉。

口絵（一）は中巻の図で、芭蕉が訪れた桜の名所吉野山を描いたもの。本文には芭蕉が貞享四年（一六八七）十月より翌年へかけて歌枕を旅した紀行文『笈の小文』（芭蕉没後乙州により刊行された）が用いられる。

参河の杜国をめし具し給ひ、初瀬・龍門にかゝり吉野、花に三日とゞまりて、曙・かそがれのけしき、有明の月の哀なるさまなど、心にせまり胸にみちて、あるは西行の枝折にまよひ、貞室がこれは〳〵とうちなぐりたるに、我いはむこと葉もなくて、いたづらに口をとぢたる、いと口をし、とぞかい給ふ。

口絵（二）は、下巻に収められる最後の図である。芭蕉が葬られた義仲寺を描いたもの。十月十二日に難波で最期を迎えた芭蕉を載せた舟は、淀川を上り十三日の朝に伏見に到る。そして十四日に埋葬された。ここには其角が編んだ芭蕉追善集『枯尾華』（元禄七年〈一六九四〉刊）収載の「芭蕉翁終焉記」を蝶夢が増補した文が記される。

義仲寺の直愚上人を導師としておの〳〵焼香し奉るに、京・難波・大津・膳所より披（被）官・従者までもこの翁をしたひ奉り、招かざるにきたりあつまるもの、三百余人なり。此地に、おのづからふりたる松あり、柳あり。かねて塚となるのいはれならむとそのまゝに、卵塔をまねび、あら墻をゆひ、冬枯の芭蕉を植て名のかたみとす。常に風景を好みたまふ癖ありけるに、所は長等山をうしろにし、前にはさゞなみ清くたゝえて、遺骨を湖上の月に照すこと、かりそめならぬ徳光のいたりなるべし。

〈参考文献〉
田中道雄、田坂英俊、中森康之編著『蝶夢全集』（和泉書院、平成二十五年）
九州大学附属図書館『雅俗繚乱―中野三敏江戸学コレクションの世界―』（平成二十七年）

（むらかみ　よしあき・本学大学院博士後期課程）